

2023 年 1 月 15 日（日）「大祭司にして審判者なるイエス」

ヨハネの黙示録 1:12-16

12 私は、語りかける声の主を見ようと振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見え、13 燭台の間には人の子のような方がおり、足元まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めていた。14 その方の頭髮は白い羊毛に似て雪のように白く、目は燃え上がる炎、15 足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のようであり、声は大水のとどろきのようであった。16 また、右手には七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が突き出て、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

【挨拶】

本年度三回目となりますが、ビサイドチャーチ東京との合同礼拝を実施できますことを心から感謝いたします。東伏見福音キリスト教会の奥村と申します。安海和宣先生との出会いを通して講壇交換の恵みが与えられ、その後、波多先生や高見澤先生とのつながりへと導かれてまいりました。そして、教会に連なる信徒の皆様と共に礼拝を守れるようになった幸いを、人生の宝と覚えております。

【序論】

さて、私たちは今日も主の招きによって礼拝に集められました。日曜日の朝、一人ひとりの心に声がかかったはずです。「礼拝で待ってるよ」という主イエスからの語りかけです。それぞれが異なる状況の下で一週間の生活を営んでまいりました。精神的に追い詰められていたり、健康上の問題を抱えていたり、家族の課題に頭を悩ませておられる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、主の呼びかけに応えて礼拝に来られました。12 節の冒頭に「私は、語りかける声の主を見ようと振り向いた。振り向くと」とあります。著者ヨハネは誰かが自分に語りかけていることに気づいたのです。「振り向く」(ἐπιστρέφω／エピストレフォー)という動詞が二回も使われ強調されている。すると、そこに主イエスが立っておられた。ヨハネが啓示を受けたのは日曜日であったと思われます。今日の私たちとある意味で似ていると言えないでしょうか。私たちも主の日に、主の語りかけを聞いて、振り向き、礼拝に参加しているのです。では、ここで私たちはどのような方と出会うことになるか。

【本論】

今日登場する主イエスには三つの顔があります。

- ① 教会と共におられるイエス
- ② 大祭司なるイエス
- ③ 審判者なるイエス

本論 1. 教会と共におられるイエス

七つの金の燭台が見え、燭台の間には人の子のような方がおり (1:12b-13a)

「金の燭台」というのは、旧約聖書では幕屋の中に保管されたもので、礼拝堂の中心に置かれていました。これは、「礼拝の中心に神がおられる」ということを表していたのです。幕屋建設に関する箇所をいくつか参照してみましょう。

- ・ 純金で燭台を作りなさい。その燭台の支柱と枝は打ち出し細工で作りなさい。(出 25:31)
- ・ また、純金で燭台を作った。その燭台の支柱と枝は打ち出し細工で作った。(出 37:17-24)
- ・ 彼が「何が見えるか」と尋ねたので、私は答えた。「すべてが金でできている燭台が見えます。」(ゼカリヤ 4:2)

ヨハネは「金の燭台」が七つ置かれているのを見たようですが、これは2～3章に出てくる「七つの教会」を表しているようです (1:20)。

あなたは、私の右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、その秘められた意味はこうだ。すなわち、七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である。

(1:20)

黙示録には「7」という数字が52回も出てきますが、この数字は完全性を表し、狭義においては小アジア地域全域の教会、広義においてはそれらに代表される全歴史の教会を象徴していると考えられています。つまり、ビサイドチャーチ東京、東伏見福音キリスト教会もこの完全性の中に含まれている。私たちにも語られている御言葉である。私たちにも啓示(隠されていた神の秘密)が明らかにされようとしている。

ここでは主イエスについて「人の子のような方」という回りくどい言い方がなされています。おそらく、ヨハネは直ちにはそれが主イエスだと分からなかったのでしょう。公生涯の間に見ていた主と違う姿だったからです。しかし、どこかで聞いたことのある方と似ていた。彼は思い出しました。そうだ、旧約聖書でたびたび語られていた「人の子」と呼ばれる終末的な王とそっくりだ。彼が想起したと思われる聖書箇所がいくつか浮かんでまいります。

- ・ 生き物の頭上の大空高くに、ラピスラズリの玉座のようなものが見えた。その玉座のようなものの上にひときわ高く、人の姿のようなものがあった。(エゼキエル 1:26)
- ・ 私は夜の幻を見ていた。見よ、人の子のような者が天の雲に乗って来て、日の老いたる者のところに着き、その前に導かれた。(ダニエル 7:13)
- ・ 見よ、人の子のような姿の者が私の唇に触れた。私は口を開いて語り、私の前に立つ人に言った。「主よ、この幻のゆえに、苦しみが私を襲い、私は力を失いました。(ダニエル 10:16)

エゼキエルもダニエルも、不思議な幻のうちに「世の終わりに現れる人物」を垣間見たのでした。そして、それから数百年後にこの方はヨハネの幻にも現れた。

「燭台の間には」という言い方がなされていますが、7つの燭台の真ん中に主イエスがおられるということを言い表しているでしょう。つまり、教会の中心、礼拝の中心に主がおられる。今まさにこの礼拝の真ん中にいてくださる。

本論 2. 大祭司なるイエス

足元まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めていた。その方の頭髮は白い羊毛に似て雪のように白く (1:13b-14a)

ここには「大祭司」としての主イエスの姿が描かれています。祭司というのは、神に対して罪人を取りなす職務であり、イメージとしては罪人を背中に隠して神と向き合い、「私に免じてこの人を赦し受け入れてあげてください」と祈る人です。

私が小学生の頃、こんなことがありました。移動教室で行った先のお土産屋で私は背負っていたリュックを商品に引っ掛けて落としてしまった。ガラス製品だったので、パリンと割れてしまったのです。どうしようと途方に暮れていると、担任の先生がやって来ました。私はこっぴどく叱られるかとビクビクしていましたが、何とその先生はその商品を手に持ち、私の手を引いて店員さんの所へ行き、「この子に悪気はなかったのですが、アクシデントで落としてしまったようです。私が弁償しますのでご容赦ください」と伝えてくれました。すると、その店員さんはニコッと笑い、「子どものすることですから」と言って許してくれたのです。確かその後、担任の先生が代金を支払っていたと思いますが、これは一つ私にとって「代わりに罪を償ってもらった」経験となりました。

主イエスは父なる神様と向き合い、私たちがこの地上で犯したすべての罪を償ってくださる。私たちが犯した罪は数えきれず、世の終わりには、自覚していることからしていないことまで、すべてが白日の下に晒されるでしょう。それは恐ろしい日であります。そのとき、それら一切の罪を覆い隠してくださるのが主イエスであり、主が持っておられる「義」であります。

ここには主イエスの大祭司としての職務を示す事柄が三つ出てきます。まず「**足元まで届く衣**」とありますが、これは旧約時代に祭司が着ていた「長服」を思い起こさせます。

それから服を取り、アロンに短衣、エフォド用の長衣、エフォド、胸当てを着せて、エフォドの帯を締めなさい。(出 29:5)

この「長服」は、祭司であると同時に王としての威厳を具えた主イエスの姿を表しています。次に登場する「**金の帯**」も同様です。更に、「**頭髮は白い羊毛に似て雪のように白く**」とありますが、「白さ」は神の栄光、聖さ、永遠性を表しています。しかも、ここでは「白い」(λευκός / レウコス) という言葉が二度繰り返されており、「際立った聖さ」「完全なる純真さ」を表現している。主イエスは罪・穢れとは無縁の神の小羊であり、完全なる大祭司としてご自身をおさげになった方であります。

私たちが誰を味方に付けているかということをしっかりと思い起こす必要がある。主イエスの聖さは真っ白に光り輝き、穢れ多き私たちの人生を完全に覆います。私たちの罪は主の十字架において償われたのであり、誰がどのように訴えても、主が与えてくださった義を取り去ることはできません。父なる神様は私たちが覆っている主イエスの白い衣を見て、私たちを「義なる者」と宣言してくださる。これが最後の審判において起こることです。

本論 3. 審判者なるイエス

目は燃え上がる炎、足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のようであり、声は大水のとどろきのようであった。また、右手には七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が突き出て、顔は強く照り輝く太陽のようであった。（1:14b-16）

先には「大祭司としてのイエス」の姿を見てきましたが、ここでは一転「審判者としてのイエス」の姿を見ることになります。ここに登場する主イエスは紛れもない神であり、物事の表も裏も知り尽くし、歴史の中で隠されてきたあらゆる事柄を暴き、ご自身の「聖なる法」に基づいて審くお方です。審判者としての主イエスを表すために、6つの説明が加えられています。

「**目は燃え上がる炎**」とは、すべてを見通す目であり、物事の真相を鋭く見極めます。「**足は燃えている炉から注ぎ出される青銅のよう**」とは、永遠に崩れ去ることのない王権を力強く表現しているでしょう。「**声は大水のとどろきのよう**」とは、誰にも曲げることのできない審判の絶対性を表していると思われます。「**右手には七つの星を持ち**」ともありますが、「**右手**」は「神の力」「神の権威」の象徴、「**七つの星**」は教会に仕える御使いを表しているでしょう（1:20）。第一世紀のミトラス教ではローマ皇帝を神格化していましたが、その皇帝が「七つの星」を持った像があったようで、これは皇帝の世界支配を表していました。この偶像化された皇帝に対して、真の神とは誰であるかを表しているのが、ここに描かれた主イエスの姿です。このことについては、後ほど、現代にはびこる「グローバリズム」との関連でもう少し詳しくお話しします。「**口からは鋭い両刃の剣が突き出て**」とは、そのことばによって正しい裁きをなさることを言い表していますが、「**両刃**」とあるように、そのことばには二つの側面があることが分かるでしょう。悔い改めない罪を容赦なく断罪するとともに、悔い改めた罪を惜しみなく赦し慰めを与えることばです。

神の言葉は生きていて、力があり、いかなる両刃の剣より鋭く、魂と霊、関節と骨髓とを切り離すまでに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができます。（ヘブル 4:12）

最後に「**顔は強く照り輝く太陽のよう**」とありますが、これは主イエスの栄光の輝きがもはや隠されることなく照り輝いていることを示しているでしょう。かつて、変貌の山において三人の弟子が主の栄光を垣間見たことがありましたが（マルコ 9:2-3）、地上の生涯における主イエスの栄光は「隠されたもの」であり、部分的にしか示されませんでした。しかし、世の終わりに現れるキリストの栄光は、誰も妨げることができない輝きで満ちています。次回扱う 17 節では「**この方を見たとき、私は死人のようにその足元に倒れた**」とされているように、罪ある人間には耐えられない輝きであります。

ここまで、「審判者なるイエス」の姿を、あくまでもヨハネが、どうにか地上のことばで表現の限りを尽くして伝えてくれた内容を見てまいりました。私たち読者も、この主の姿は想像するほかはなく、実際にこの目で見ると日にはヨハネのような恐れをもってひれ伏す以外にないでしょう。自分の地上の生涯のすべてのシーンが主の栄光で照らされ、自分の目で見直すことになると思われるからです。だからこそ大祭司なるイエスが必要なのです。

【展開】

さて、先ほど少しふれましたように、この世界はどの時代にも神に敵対する勢力が暗躍しています。第一世紀にはローマ帝国が台頭していましたが、世界支配を目指して拡大する見えない力は形を変えながらも本質を同じくして現れ続けています。現代の世界を飲み込みつつある一つの大きな勢力がある。それは「グローバリズム」と呼ばれるもので、各国政府の上に君臨する「政府の上の政府」です。その典型的な例として EU ヨーロッパ連合が挙げられますが、これはヨーロッパ 27 カ国の上に置かれた「欧州政府」であり、そこで決定されることに EU 加盟国は従わなくてはなりません。グローバリズムの目指すところは、全世界の国々を従える「世界統一政府」の完成であり、従来の各国の通貨、宗教、言語、歴史、伝統、誇り、国境をなくし、すべてを一元管理することです。通貨の一元化と聞くと便利になるように感じるかもしれません。言語が一つになれば言葉の壁がなくなるので楽になるでしょうか。国境がなくなれば誰でも自由に行き来できる社会が実現するでしょうか。その一見「便利」な響きは実は真逆の結果をもたらす可能性があり、民衆からあらゆる自由を奪うものとなるかもしれません。例えば、宗教の一元化と聞くと、私たちキリスト者は何を思うか。そこで礼拝されるのは一体誰なのか。それは私たちが信じる神ではありません。キリストではない。世界政府そのものが神格化されるのであり、その支配下にあつてはまことの神を礼拝することが禁じられてしまうでしょう。

では、国境の問題はどうか。2015 年の欧州移民危機によって起きたことを思い起こしてみたい。当時中東ではシリアを中心に多くの紛争がありましたが、そこで大量の中東移民が発生しました。このとき EU 本部は、100 万人以上の移民を受け入れる政策を打ち出しました。中東移民は労働力としては安価なので、ヨーロッパの企業はどんどん彼らを採用していましたが、その結果、元いた人々の多くが職を失い、更に彼らが税金として支払ってきた社会保険が移民に対して適用されるようになっていきました。移民にとっては大変ありがたい話でしたが、元いたヨーロッパの人々の不満は爆発し、イギリスは 2016 年の国民投票によって EU を離脱しました。これが「ブレグジット」と呼ばれる出来事です。移民を受け入れたことによって生じたもう一つの問題は、不法移民による犯罪が激増したこと。スウェーデンではレイプ事件が 5 年の間に 4 万件増加し、4 人に 1 人が性犯罪の被害者となってしまうしました。ドイツでも 2015 年の大晦日から翌年にかけて、ケルンを中心に複数の町で性的暴行や窃盗事件が多発し、たった一晚で 900 件近くの被害届が出されたといわれています。

グローバリズムのもう一つの問題点は、極度の貧富の差がもたらされるということ。今世界中で食糧、通貨、エネルギー、教育などの分野でリセットが起きていることにお気づきでしょうか。日本を含め、農業と畜産業がどんどん潰されつつあります。ニュージーランド、オーストラリア、オランダなどの国々は、政府が補助金を出して農家や牧畜をやめさせる方向で動いています。日本も、戦後ずっと続けられてきた減反政策の最終段階に入っており、2023 年には米農家の 98%が赤字になるため、経営が成り立たなくなると言われています。

更に、世界中の食品倉庫が謎の火災や爆破に見舞われている。今起きてきている世界的な食糧危機は、意図的につくられているのではないか。ここ 100 年の間に世界の人口は 20 億人から 80 億人に増加しましたが、これだけの人口を養えるようになったのは肥料の開発と農業テクノロジーの発達によると言われます。私たちは農業機器を動かす石油を食べているとも言われるほどです。その肥料と、機械を動かすエネルギーの供給が滞ったとしたら、当然これまでのように農作物を生産することができなくなるでしょう。需要と供給のバランスが崩れると、生産力の減退という負のスパイラルが起き始めます。では、従来の食糧に代わるものとして何が提供されていくかという、それが今話題の昆虫食であり、人工培養肉です。アメリカのサンフランシスコでは「イート・ジャスト」という巨大な培養肉工場が建設され、間もなく本格的に稼働すると言われています。民衆は世界政府が配給として提供するものだけを食えることが目論まれている。これが「食糧のリセット」であります。

では、「エネルギーのリセット」とは何か。昨年秋にロシアとドイツ（欧州）を結ぶガスパイプライン、ノルドストリームが爆破されたのは記憶に新しいでしょう。各国が始まっているエネルギー不足と高騰は何を意味しているか。今年の 4 月以降、日本でも電気代の上限が撤廃され、驚くような金額が請求されることになるかもしれません。その先には、電気もガスも原油も、配給制としていく準備が進められています。つまり、エネルギー全般も「世界政府」が管理し、各国の自由にはなくなることが目指されているのです。

これらすべてをひっくるめて「グレートリセット」と言われます。2020 年に生じたコロナ危機によって、この計画は本格的に始動しました。これから 2030 年を目標に世界はその方向へと向かっていくでしょう。ただ、それに反対する勢力もあり、いわゆる「ナショナリズム」に立ち続けようとする国々は、自国の独自性と自由を守ろうとして戦っています。

【結論】

私は、このような時代にあってキリスト者が立つべき位置はどこであるかを模索し続けています。主イエスが地上でどのように生きられたかを学ばなくてはなりません。主イエスもローマ帝国の支配下にあるユダヤで一個の国民として生きておられました。しかし、主はそのような世界においてさえ、何者にも支配されることはなかったのです。主はあくまでも「神の国」に属しておられました。そして、主は「獣の国」が神格化されるとき、いつの時代にあっても「否」を唱え続けておられるのです。グローバリズムとは一つの巨大な宗教であり、キリストを唯一の神とする聖書の教えに真っ向から対立する思想です。私はここにこそ現代のキリスト者の戦いがあると思っています。

私たちは自分の主が誰であるかをどんなときにも確認し続けながら地上の生涯を歩んでいきたい。私たち的大祭司であり終わりの日の審判者である主イエスにのみ目を向け続けたい。この方以外に救いはないからです。やがてすべての悪は審かれ、滅ぼされることになるでしょう。黙示録はそのことを既に予告しています。力強い右手で聖徒を守り、とりなしをやめることのない永遠の大祭司を信じて歩んでいきたいと思います。

【祈り】

大祭司にして審判者なるイエス・キリストの父なる神様。今日も私たちはあなたの招きによって、この礼拝に集いました。礼拝に参加できるということそのものが、当たり前ではなく、主イエスの贖いの御業の結果であります。そして、主の日を守り続けていく先に、神との永遠の交わりが用意されているということを覚え、感謝いたします。与えられた一回一回を大切に、礼拝されるべき方に栄光を帰することができますように。私たちが生きている世界は、自分の思うようには動いていかない現実がありますが、主イエスが生きられたように私たちも神の国に属し、この地にまことの平和をつくり出すものでありたく願います。このように、同じ主を信じる人々と共に礼拝できる恵みに感謝いたします。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
礼拝の中心に在し、一人びとりを御許に招き給う、父なる神の愛、
罪人のためにいのちを捨て、今も尚とりなしを続け給う、主イエス・キリストの恵み、
主が再び来られる日まで、教会を守り給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。